

介詞“向”の意味——移動するものは何か

干野真一

0. はじめに

中国語の介詞は凡そ動詞に由来するものであり、動詞からの虚化の程度の違いにより様々な用法が存在する。いま現代中国語で用いられている介詞の用法は、近世中国語からの変遷過程において意味機能が整理されてきたものであると考えられる。そして近世中国語に見られる用例には現代中国語では既に淘汰されたと思われる用法も存在し、それらは介詞がどのように成り立ってきたかを理解する手がかりとなる。本稿では近世語、現代語を通じて多様な用法を持つ介詞“向”について、近世語に見られる用法から考察を行い、従来の分類とは異なる新たな統一的な基準による解釈を提示する。

1. 序論

1.1 問題の所在

本稿は中国近世語において多様な用法を有する介詞“向”について考察するものであるが、先ず現代中国語における用法から概観する。例えば侯学超1998では介詞“向”について次の用法があるとする。ここでは、用法の説明および挙例の中から3例を引用する。

二、表示行为动作的对象。向+名词/名词短语，作状语。

1. 相当于‘对’（表行为时）、‘朝’（表动作时）：

~人民负责 | ~你们致敬 | 他~我瞧了半天

2. 相当于‘从…那里’。动作表示获取意义，或带结果补语：

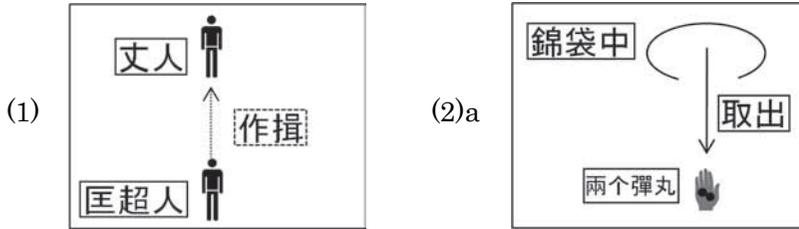
~雷锋同志学习 | ~一个亲戚借了一万元 | ~下边了解情况

介詞“向”は「向く、向かう」という動詞用法に由来するものであるため、“S向NV”という構造においては“对”や“朝”に相当するというSからNへ向けた「~へ/に」というベクトルが容易に類推される。しかしながら、同時に“从…那里”というNからSへの「~から」というベクトルをも表すことが出来る点は注目に値する。

さて、このような用法は近世語においても報告があり、例えば雷文治2002では“向”の介詞用法として「(3)方所介词。①意为“在”。②意为“从”。③意为“朝”。(4)时间介词，意为“到”。(5)对象介词，意为“对。”」と、5つの介詞の意味を提示しており、やはり“朝”や“對”と“从”という対立に見られる2つのベクトルが確認される。実際に『儒林外史』に次のような用例が見られる。

(1) 匡超人嚇癡了，向丈人作了揖，便問（儒林20/4B4）

(2) 將彈弓拿了，走出天井來，向腰間錦袋中取出兩個彈丸拿在手裡（儒林34/14B9）



上図は(1)および(4)を簡略化したものであるが、矢印により示される“向”が担っている部分は真逆のベクトルであることが明白である。

“向”が近世語において現代語よりも広範な用法を持つことについては、蔣紹愚等2005：169にも簡潔な既述が見られ¹、馬貝加2002では“向”を12もの項目に細分している²。上述の雷文治2002からは“向”が異なるタイプの介詞の意義を内包していることが確認され、馬貝加2002の用法分類からは介詞の各用法を決定付けるのは述語成分であることが読みとれよう。これらは詳細な分析を経た用法分類であるが、本節で確認したような正反対に思えるベクトルが同時に存在することをどう捉えるべきか、また用法の細分化により介詞本来の意味を把握することが却って困難となっているなどの問題が残されているように思われる。

そこで本稿では、新たな基準による統一的な解釈を試みることにし、“向”をどのように捉えることが可能であるか次節において検討する。上掲の近世語に関する先行研究が、“向”について、介詞目的語や共起する述語動詞の細分によってなるだけ網羅的に用法を列挙するという言わばミクロ的な記述であるとすれば、本稿は逆にマクロ的な視点から“向”を記述することを目指すものである。なぜなら“向”のように汎用性の高い介詞であればこそ、大雑把で緩やかな記述の方がより実際の認識に近いものと考えられるからである。

1.2 基準となる要素

本稿の冒頭でも述べた通り、介詞は動詞に由来するものであるが、“向”は実義性を比較的に残しているタイプの介詞であると言え、それは「移動義」という要素によって一連のつながりとして捉えることが可能であると思われる。従来認識では“向”は虚化が進むにつれて移動義が失われていくというものであったが、本稿では虚化が進んでも移動義は保ったままであり「移動物」に変化が生じていると考える。つまり、「移動すること」ではなく「移動するもの」に変化が見られるという観点から考察する。

具体的な例を確認すれば、次の(3)では、体全体の移動が感じられ、(4)では声の移動が確認される。

(3) 賈母王夫人便命人向街上找尋去。(程甲25/11A7)

(4) 空空道人看了一回，晓得這石頭有些來歷，遂向石頭說道：“石兄，你這一段故事，據你自己說來，有些趣味，故鐫寫在此，意欲聞世傳奇。(程甲1/2B9)

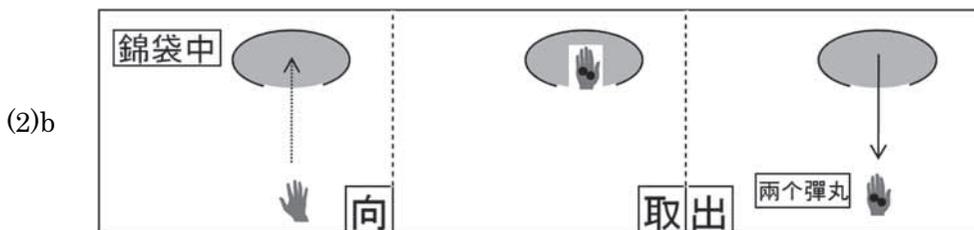
同様にして、“S向N”で表される出来事においてSからNへ移動すると考えられる移動物は、以下のような具象性の高いものから低いものに至る「S自体あるいはSから発生したもの」が考えられる。

移動するもの：

からだ全体 / からだの一部 / 声 / 身振り / 視線 / 意識

これらの要素は“向”を統一的な枠組みの中で説明するための便宜的な基準であり、実際の用例が厳格に分類されることはまれで、むしろ幾つかの要素に跨っているものが多い。そのような点からも先行研究に見られるような介詞目的語や述語動詞の種類による分類とは合致しない点がある。例えば(1)に見られる状況を例にとれば、“作揖”という「身振り」は同時に声や視線をも伴っていると考えるのが自然である。つまり、意味的要素はグラデーション状に配置され、それらが全体として一つのまとまりを形成するものであると考えられる。

そして、この基準によって、前節で確認した2つの正反対のベクトルについても統一的な説明が可能であると考えられる。例えば、前節で見た(2)aをより詳しく分析すると、実は(2)bのような構造となっている。“向”フレーズによって「体の一部：手が移動すること」を表しており、N：“錦袋中”から「取り出す」ことについては述語動作の結果であると考えられる。



1.3 考察対象

前節で確認した新たな解釈について、次章からそれぞれの基準を用いて具体的に考察を進めるが、本節ではその調査対象について述べる。

本稿では考察する資料として、清代前期の語彙資料である『紅樓夢』および『儒林外史』の用例を検討する。その理由として、先ず、事前調査から清朝前期の“向”は量的・質的に見て介詞として最盛期を迎えている——用例数および用法数が多い——と判断されることが挙げられる。また、使用範囲が広範に渡ることにより、現代中国語からすれば「破格」とも言える用例が散見することが“向”が持つ中心義を捉えるのに効果的であると判断した。さらに『紅樓夢』の版本間において介詞の書き換えが確認され、類義語との互換性という観点からの考察が可能である。

他方、『紅樓夢』および『儒林外史』に見られる“向”については、これまでも早くは宮田1968などで類義語の介詞との考察が行われ、大まかな使用傾向が提示されている。宮田1968では「ある場所から物を取り出す」という表現で用いられる介詞について、“向”が『金瓶梅』→『紅樓夢』，“在”が『拍案驚奇』→『儒林外史』という、一つの大まかな系統を想定することができるようである」と述べられている。筆者はそのような「傾向」が起こる背景として、類義語関係にある介詞間には意味的な接点が存在すると考える。介詞はそれぞれ意味的なネットワークを有するが、「類義語関係」とはそのネットワーク間

に重なる部分が存在することで成立するものである。

本稿で重点的に取り上げるのは“向”であるが、その意味的な拡がりを捉え、どのような点で“在”との接点が存在するのかを考察することは、先行研究によって明らかにされている「傾向」を意味的な背景から検討するものであり、延いては介詞体系についてより深く理解するために不可欠であると考ええる。

2. 考察 1

2.1 用例の考察 1 (介詞目的語が場所であるものを中心に)

本章および次章では“向”の新たな分類基準として「“S 向 N V”で表される出来事における S から N への移動物は何にか」を念頭に置きながら、『紅樓夢』および『儒林外史』に見られる用例を考察する。以下、次の具体的な基準の順に記述を進める。

- A：からだ全体
- B：からだの一部
- C：からだの一部（物の移動も含む）
- D：声
- E：身振りにより表される意思
- F：視線
- G：感情、意識

これらのうち、本章では A～C について考察する。これらは介詞目的語が場所であるものが中心となる。

2.2 からだ全体が移動 (A)

本節で考察する用例は、動作主 S が“向”の目的語——主に場所名詞——に移動し何らかの動作を行うというものである。S から N に移動するのは S 自身であり、つまり「からだ全体」が物理的に移動する。“向”には実義性が強く感じられ、例えば(5)は連動文の第一動詞が“向”となっているとも判断される類のものである。もともと動詞であった語彙が、連動文の第一動詞に用いられることで動詞から介詞への文法化のきっかけとなることは呉福祥2003³にも指摘がある。

- (5) 果然王夫人已認了薛寶琴做乾女兒，賈母喜歡非常，不命往園中住，晚上跟著賈母一處安寢。薛蝌自向薛蟠書房住下了。(程甲49／4 B 1)

どこかへ移動して動作を行うという用例には、さらに以下のような例が確認される。

- (6) 這裡黛玉越發氣悶，只向窗前流淚。(程甲20／8 B 2)
- (7) 只見李宮裁、迎春、探春、惜春並各項人等，都向怡紅院內去過之後，一起一起的散盡了。(程甲35／1 A 5)
- (8) (賈璉) 說著，便向後面換衣服去了。(程甲24／4 A 10)
- (9) 如今自知理虧，還不過來向嚴老爺跟前磕頭討饒。(儒林6／12 A 9)
- (10) 自此，聚的錢不買書了，託人向城裏買些胭脂鉛粉之類學畫荷花。(儒林 1／5 A 7)
- (11) 薛姨媽道：“把那匣子裡的花兒拿來。”香菱答應了，向那邊捧了個小錦匣兒來。(程甲 7／3 A 7)

(10)および(11)については、それぞれ「城内から絵の具を買ってきてもらい」、「あちらから箱を捧げてきた」と訳すことも可能であるが、構造上は「城内」および「あちら」へ行き、物を入手するという出来事を伝えており、(11)において“向～”は箱を獲得するための背景となっている。出来事全体から見た場合、「物の発生」は顕著な事象であるので、中国語で“起点”と分類されたり、日本語で「～から」と訳されたりするなど「物の発生」に特化した認識となることは自然なことであるが、その背景には獲得する場所への移動があるのである。以下の(12)および(13)も、どこかへ移動し移動先で何かを入手するという点で同様である。

(12) 那少年道：“請坐，我去取茶來。即向茶室裏開了一碗茶，送在馬二先生跟前，陪着坐下。
(儒林15／9 B 2)

(13) 因向帳房里秤出一兩銀子來，遞與他說道：“我也不留了，你請尊便罷。”(儒林23／8 B 4)

以上、本節で確認した例はすべてS自身つまり「からだ全体」がNへ移動することを表すものである。

2.3 からだの一部が移動 (B)

続いて、SからNへの移動が「からだの一部」であるものを確認する。これはAと比較すると「全体一部分」という関連性から類推されるものである。Aでは介詞目的語が「からだ全体」で移動する場所であったが、本節で扱う“向”の目的語は「一般的には、からだ全体では移動できない場所」となっている。例えば、(14)～(17)では手が、(18)では臀部が介詞目的語へと移動する。さらに(19)で移動するのは動作主Sの脚である。

(14) 麝月聽說，回手便把寶玉披着起來的一件貂須滿襟暖襖披上，下去向盆內洗洗手，先倒了一鐘溫水，拿了大漱盂，寶玉漱了口。(程甲51／7 A 9)

(15) (寶玉) 說着翻身起來，將兩隻手呵了兩口，便伸向黛玉膈肢窩內兩脇下亂撓。(程甲19／14 A 4)

(16) 寶玉聽了回手向懷內掏出一個核桃大的金表來，瞧了一瞧，(程甲45／13 A 5)

(17) 寶玉早向賈珍手裡接過對牌來，強遞與鳳姐了。(程甲13／9 A 3)

(18) 黛玉心中料定這是賈政之位，因見挨炕一溜三張椅子上也搭着半舊的彈花椅袱，黛玉便向椅上坐了。(程甲3／9 A 1)

(19) 他便使盡平生力氣，飛起右腳，向他襠裡一腳踢去。(儒林52／6 B 9)

次の(20)は、Sの手がNへ向けて移動するが接触は無く、後述する「E：身振りにより表される意思」が移動するとも考えられるが、ここではSの手がNに向かう部分に注目して分類する。

(20) (馬道婆) 便點頭嘆息，一面向寶玉臉上用指頭畫了幾畫，(程甲25／4 A 9)

続く(21)、(22)では頭全体が移動し、移動先で口を使った動作が行われる。(21)では(20)同様にNへの接触は無く、動作主の口が聞き手の耳元に移動して発話が行われ、(22)も同様に頭全体が“葦根下”へと移動して、飲む行為が行われる。

(21) (司棋) 又向迎春耳邊說：“好歹打聽我受罪，替我說個情兒，就是主僕一場！”(程甲 77 / 4 A 9)

(22) 薛蟠忙道：“我喝我喝！”說著，只得俯頭向葦根下喝了一口，(程甲47 / 11 B 7)

次の(23)はAとBの中間に位置づけられる例と言えよう。なぜなら、枕元へは「からだ全体」で移動するものの、「拿」という動作は手で行われるためである。(24)も同様の用例である。

(23) 寶玉見他嬌嗔滿面，情不可禁，便向枕邊拿起一根玉簪來，一跌兩段，說道：“我再不聽你說，就同這簪一樣！”(程甲21 / 6 B 4)

(24) 寶玉聽了有理，也只得罷了，向案上斟了茶來給襲人漱口。(程甲31 / 1 B 2)

本稿の冒頭に挙げた(2)もこの分類となるが(16)などと同様に、述べられている出来事は「物を取り出す」という行為である。工具書などにおいても「起点」や「発生源」と分類される用例であるが、しかしながら以下に考察するとおり、「物の獲得」は動作の結果であり「向」は手を伸ばす部分しか担っていないと考える。例えば(25)では「捜すこと」と「取り出すこと」を表すのに“掏”を二回用いており、「捜す」と「取り出す」が別の動作であることを示している。さらに(26)では求めていたものとは別の物が見つかるという用例である。

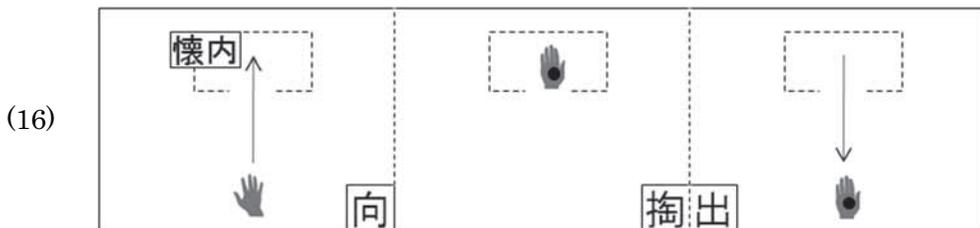
(25) (馬道婆) 收了欠契，又向褲腰裡掏了半晌，掏出十個紙鈔的青面白髮的鬼來，並兩個紙人遞與趙姨娘。(庚辰25 / 7 B 3)

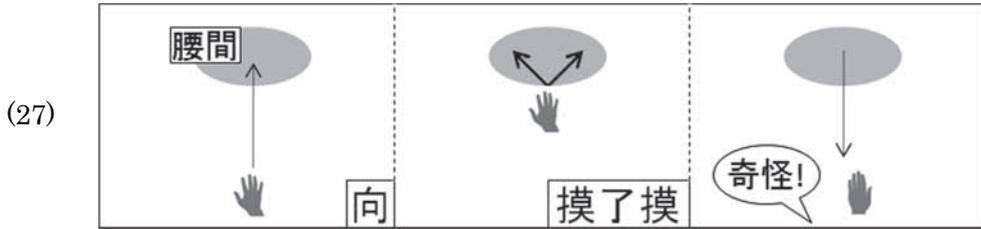
(26) 小紅便賭氣把那樣子擲在一邊，向抽屜內找筆。找了半天，都是禿了的，因說道：“前兒一枝新筆放在那裡了？怎麼想不起來？”(程甲26 / 3 A 3)

次の(27)は『品花寶鑑』に見られる例であるが「物の獲得」が達成されておらず、手のみが移動しているだけであることが明らかである。

(27) 聘才道：“咱們也好散了。”輕輕的轉著元茂耳邊道：“你拿那來西出來，交給櫃上算錢罷。”元茂便向腰間摸了兩摸，失張失致的道：“奇怪！”站起來，把衣裳後衿掀起，對聘才道：“你看可有？”聘才道：“有什麼？”元茂道：“搭連袋兒。”聘才道：“沒有。”元茂臉上登時發怔道：“這又奇了，那裏去了？”保珠道：“丟了什麼？”元茂不答應，又從懷裏亂摸一陣，也沒有，那臉上就一陣陣白起來。解了腰帶，抖一抖不見有。(品花寶鑑 8 / 15 A 7)

ここで、(16)および(27)で表される出来事について、以下に図示を試みる。





上図を比べると、動作の結果として物を獲得したか否かについては真逆の結果であるものの、「向+介詞目的語」は同一の内容を担っていることが確認される。

なお、干野2009ではBおよびCについて、介詞目的語を基準として「移動する場所が限定的なもの」と分類したが、それは動作の主体である手（及び運ばれる物）の特性に起因するに過ぎず、“向”自体は一貫して移動のベクトルを表している。

2.4 からだの一部が移動（物の移動を伴う）(C)

本節では、動作主Sが何かを持った状態でその手がNへ移動するという用例について考察する。Sのからだの一部が移動するという点でBと共通するが、本節で考察するのはさらに物——手で扱える物が多い——の移動をも伴うものである。

次の(28)、(29)では、手に棒状の物を持ってNめがけて振り下ろすという場面であり、(30)～(32)では、それぞれ、香、提灯、筆を持った手が移動する様子が描かれている。

(28) 當下比定了中心，手持鋼刀，向老和尚頭頂心裏劈將下來。（儒林39／3 B 4）

(29) 正心疼肝斷，無計可施，聽鶯兒如此說，便倚老賣老，拿起拄杖向春燕身上擊了幾下，罵道：（程甲59／5 B 3）

(30) 一個十一二歲的小廝又向爐內添上些香。（儒林49／13 A 2）

(31) 寶玉聽說，果然持燈向地下一照，只見一口鮮血在地。（程甲30／10 B 10）

(32) 寶玉聽了，碰在心坎兒上，遂立想了四句，向紙上寫了，呈與賈政看。（程甲75／14 A 3）

上記の例は物を持ったまま動作が行われる場面であるが、次の2例のように物を放り投げるなどして手離すという用例も見られる。この場合において“向”が含意するベクトルは任意の方向や対象物に向けた手の移動によって実現され、その手の移動の結果、ベクトルの延長線上を物が移動する。

(33) 黛玉雖然哭著，卻一眼看見了他穿著簇新藕合紗衫，竟去拭淚，便一面自己拭淚，一面回身將枕上搭的一方綃帕拿起來向寶玉懷裡一擗，一語不發，仍掩面而泣。（程甲30／3 A 3）

(34) 只見一個未留頭的小丫頭走進來，手裡拿着些花樣子并兩張紙，說道：“這兩個花樣子叫你描出來呢。”說着，向小紅擲下，回轉身就跑了。（程甲26／2 B 9）

さらに(35)、(36)では、先ずある場所へ手を伸ばして物を手にし（上掲Bの「取り出す」用法）、さらにそれを手にしたまま別の場所へ移動させるという動作の両方に“向”が使われている。(37)では逆に、放り投げられた物を拾うという場面である。

(35) 寶釵意欲撲了來玩耍，遂向袖中取出扇子來，向草地下來撲。（程甲30／3 A 3）

- (36) 寶玉見了他，就有些戀戀不捨的，悄悄的探頭瞧瞧王夫人合著眼，便自己向身邊荷包裡帶的香雪潤津丹掏了一丸出來，向金釧兒口裡一送，金釧兒並不睜眼，只管噙了。(程甲30/6A6)
- (37) 賈環見了，喜的就伸手來接，芳官便忙向炕上一擲。賈環見了，也只得向炕上拾了，揣在懷內，方作辭而去。(程甲60/3A3)

以上3例からも、前節で確認した点と同様に“向”は「取り出す」動作が起こる直前の、介詞目的語への手の移動のみを表していることが明らかである。

2.5 小結

本章では介詞目的語Nが主に場所である用例について、具体的な物の移動に着目して考察を行った。これらの“向”の用法については、雷文治2002に見るように“往”、“在”、“從”などと解釈することも考えられる。しかし、本稿では“向”が表すベクトルにおいて、どの部分に焦点が当てられているかの違いによるものであると考える。つまり、Aの分類ではNへの移動性(“往”)や、動作が起こる場所としてのN(“在”)という意識が強く、Bでは動作が起こる場所としての意識や、「取り出す」類の用法については「物の発生する場所：起点」(“從”)という点に焦点が当てられている。そしてCではNへの移動性に焦点がある。“向”とはこのような幾つかの焦点を内包するものであり。これら「焦点の移動」こそが“向”を多義たらしめる所以であると思われる。“向”の焦点の移動と類義語関係にある介詞との接点については3章で述べる。

3. 考察2

3.1 用例の考察2 (介詞目的語が人物であるものを中心に)

本章では“S向NV”で表される出来事においてNが主に人物である用例を考察する。本章で取り上げる用例は前章で考察したA～Cのタイプほど「物の移動」が顕著ではない。例えば、D：声が移動するタイプは厳密には「空気振動の移動」であるが一般には不可視なものであるため意識されにくいものである。他に、身振りで表される意思、視線、感情・意識という要素から考察する。

なお、本稿の冒頭において(1)を例にした通り、D～Gの用法については複数の要素が関係している場合がほとんどであるが、そのうち特徴的と思われる要素により分類を行うものとする。

3.2 声が移動(D)

本節ではSから発せられた声がNへ伝わる、即ち「声が移動する」用例について検討する。述語動詞としては、「話す、説明する、罵る」といったいわゆる言説動詞が中心となる。この分類の代表格は(38)の如き“S向N道”という形式であり、『紅樓夢』および『儒林外史』の地の文において大量に確認され、この2作品中に見られる“向”の最多の用法である。また、他の明清文学作品と比較しても用例数は多く、明清期に白話小説がジャンルとして成熟するなか、このような表現形式が定着したのではないだろうか。

- (38) 那僧便大哭起來，又向士隱道：“施主，你把這有命無運，累及爹娘之物抱在懷內作甚！”
(程甲1／6B8)
- (39) 太老爺聽了這話，甚是歡喜，向小人吩咐說，自己不能遠來，這事總央煩二位老爺做主。
(儒林10／11A5)
- (40) 鮑文卿向向太守道：“太老爺又恭喜高陞！”(儒林26／4B9)

次に“説”が結果補語を伴うものや、他の言説動詞が使われている例を挙げる。

- (41) 賈蓉道：“叔叔回家，一點聲色也別露。等我回明了我父親，向我老娘說妥，然後在偈們府後方近左右，買上一所房子及應用傢伙，再撥兩窩子家人過去服侍，擇了日子，人不知鬼不覺娶了過去。(程甲64／13A4)
- (42) 申祥甫拿出一副藍布被褥，送周先生到觀音庵歇宿，向和尚說定，館地就在後門裏這兩間屋內。(儒林2／10A1)
- (43) 次日，蘧公孫向兩表叔畧述一二。(儒林12／14B1)
- (44) 不由分說，向虔婆大哭大罵，要尋刀刎頸，要尋繩子上弔鬆都滾掉了。(儒林54／18B7)
- (45) 當下喫完了酒，鮑文卿辭了回來，向向知府着實稱贊這季少爺好个相貌，將來不可限量。
(儒林26／4A7)

これら本節で確認する用例では、SからNへ向けて「声が移動する」ことにより“向”のベクトルが実現している。次の2例で用いられている述語動詞は、双方向的な動作を表すものであるが、Sの側から「話を持っていく、切り出す」という点で“向”が機能していると言える。

- (46) 金氏聽了這一番話，把方纔在他嫂子家的那一團要向秦氏理論的盛氣，早嚇的丟在爪窪國去了。(程甲10／4A2)
- (47) 那老爹見他十月裡還穿着夏布衣裳，問道：“…，你老人家這些親戚、本家事體總還是好的，你何不去向他們商議商議，借个大大的本錢，做些大生意過日子？”(儒林55／9A9)

以下の(48)～(50)では介詞目的語が場所或いは方向となっているが、述語動詞や発話内容からも人物に宛てたものであることは明白である。

- (48) 至次日，薛姨媽命人請了張德輝來在書房中，命薛蟠款待酒飯。自己在後廊下隔着窗子，向裏千言萬語囑托德輝照管。(庚辰48／2B5)
- (49) 寶玉笑道：“虧你提起來。”說着，便仰頭向窗外道：“寶姐姐，吃過飯叫鶯兒來，煩他打幾根條子，可得閑兒？”(程甲35／7A1)
- (50) 這鳳姐忽又想起一事來，便向窗外叫：“蓉兒回來！”(程甲6／11A7)

ここまで、述語が言説動詞であるものについて確認してきたが、「音声の伝達」という点では次のような動詞“啐”を用いた用例も確認された。“啐”は本来「唾やたんを吐く」という意味で用いられるが、「不満や怒りの語気を表す感嘆詞」としても用いられる。そして、その不満の語気を唾棄せずに行ったものが「舌打ち」であると言えよう。次の(51)、(52)は「舌打ちをする」場面であり、(53)は実際に唾棄する場面とされる。

- (51) 寶釵原是掩面哭的，聽如此說由不得又好笑了，遂抬頭向地下啐了一口，說道：（程甲35／3 A 2）⁴
- (52) 鳳姐聽了，“嗤”的一聲笑了，向賈璉啐了一口，低下頭便吃飯。（程甲23／2 A 10）⁵
- (53) 那小廝們都知道賈珍素日的性子，違拗不得，便有個小廝上來向賈蓉臉上啐了一口。（程甲29／4 B 5）⁶

唾棄であるか舌打ちであるかについては断じきれない部分もあるが、「唾棄」であれば「からだの一部からものが放たれる」点で既述の用法Cに通じる部分があり、「舌打ち」であれば「Nに対して何らかのサインを送る」という点で次節の用法Eに通じる部分がある。何れにしても不満の語気を具体的に表出して、SからNへ向けて発せられたものであり、不満の「感情が移動する」という点では後述する分類Gに通底するものである。

さらに、口頭で行われるあいさつ表現も本節の分類とする。以下に挙げる例では「音声」と共に「挨拶の意識」を移動させているものと考えられる。当然ながら、あいさつは身振りや表情を伴うことが常であるため、次節の「E：身振りより表される意思が移動する」用法とも不可分であるが、本節では音声を紹介しているものを取り上げる。

- (54) 二位整一整衣帽，叫管家擎着帖子，向貢生謝了擾，一直來到宅門口，投進帖子去。（儒林4／12 A 5）
- (55) 只見三騎馬進來，下了馬向餘大先生道喜。（儒林48／1 A 5）
- (56) 施御史的孫子也來看了一會，向和尚作別去了。（儒林55／4 A 7）
- (57) 只見這寶玉向賈母請了安，賈母使命：“去見你娘來。”（程甲3／10 A 9）
- (58) 吃畢，大家纔出園子，來到上房，坐下吃了茶，纔叫預備車，向尤氏的母親告了辭。（程甲11／8 B 2）

これらの用例においては挨拶のことばを口にすることで、音声と共に挨拶の意思が移動していると考えられる。

以上、本節では「声が移動する」用例について考察した。

3.3 身振りにより表される意思が移動（E）

続いてSが挨拶のしぐさや身振りによってNに何らかの意思を伝達するという用例を検討する。Sが行う身振りには体の一部で行うものもあれば、体全体を使うものもある。例えば(59)や(60)では手を使って相手に合図を送っており、(61)、(62)は唇を動かすことでサインを送る例である。介詞目的語が場所となっているものについても、動作の受け手が存在することは明白である。また、(64)では「笑いながら言う」という述語動詞が後続するが、前節のDや後述するG（感情が移動する用法）にも関連するものである。

- (59) 襲人恐驚動了人，被寶玉知道了，只向他搖手，不叫他說話。（程甲41／11 B 10）
- (60) 寶玉便向鏡內笑道：“滿屋裡就只是他磨牙。”麝月聽說，忙向鏡中擺手兒。寶玉會意，（程甲20／4 B 4）
- (61) 只見王夫人的丫鬟金釧兒和那一個纔留了頭的小女孩兒站在臺磯上頑。見周瑞家的來了，便知有話來回，因向內努嘴兒。（程甲7／1 A 7）
- (62) 傍邊紫鵲將嘴向床後棹上一努。（程甲67／5 A 6）

- (63) 寶玉答應了，慢慢的退出去，**向**金釧兒笑着伸伸舌頭，帶着兩個老嫗嫗，一溜煙去了。(程甲23／5 A 8)
- (64) (兩公子) 走到書房內，**向**公孫笑着說道：“(儒林10／4 A 3)

これらは、身振りを行うことで任意の意思を相手に移動させるものである。

続いて、挨拶行為の用例を確認する。前節では音声を介した挨拶を確認したが、身振りによるものも、拱手の礼、お辞儀、土下座など、いくつかの種類が見られる。

- (65) 范進**向他**作揖，坐下。(儒林3／8 A 9)
- (66) (家老爺) 所以着小的來**向**匡爺叩喜。(儒林20／3 A 3)
- (67) 鮑文卿趕上幾步，**向他**拱手道老爹是會修補樂器的麼？(儒林25／1 A 9)
- (68) 遲均、杜儀各捧香燭，**向**門外躬身迎接。(儒林37／4 B 8)
- (69) 那人聽了這話，**向**郭孝子磕頭，說道：“(儒林38／10 B 3)
- (70) 柳家的母女忙**向上**磕頭，林家的就帶回園中，回了李執探春。(程甲62／1 A 7)
- (71) (賈蓉) 一會兒，果然帶了一個小後生來：較寶玉略瘦些，眉清目秀，粉面朱唇，身材俊俏，舉止風流，似在寶玉之上，只是怯怯羞羞有女兒之態，靦腆含糊的**向**鳳姐作揖問好。(程甲7／9 A 1)
- (72) 那人到門首下了馬，**向**王冕施禮道：“動問一聲。那裏是王冕先生家？”(儒林1／16 A 1)

以上の用例は、Sの身振りによって挨拶する意識がNに移動するものである。

3.4 視線が移動 (F)

本節ではSからNへ視線が移動する例について考察する。“S向NV”におけるVには“看、望、瞧”など視覚的な動作を表すものが多く、Nには場所、方向、人物が入り多岐にわたる。

- (73) 寶玉便覺眼錫骨軟，連說：“好香！”入房**向**壁上看時，有唐伯虎畫的《海棠春睡圖》，(程甲5／2 B10)
- (74) 寶玉倒唬了一跳，敢是：“美人活了不成？”乃大着膽子，舐破窗紙。**向**內一看，那軸美人卻不會活，卻是茗煙按着一個女孩子，也幹那警幻所訓之事。(程甲2／2 A10)
- (75) 寶玉從夢中驚醒，睜眼一看，不是別人，卻是林黛玉。猶恐是夢，忙又將身子欠起來，**向**臉上細細一認，只見他兩個眼睛腫得桃兒一般，滿面淚光，不是黛玉卻是那個？(程甲34／3 B10)
- (76) 這裡黛玉還是立於花陰之下，遠遠的卻**向**怡紅院內望着。(程甲35／1 A 4)
- (77) 寶釵坐下，因問鶯兒：“打什麼呢？”一面問，一面向他手裡去瞧，纔打了半截。(程甲35／13 A10)
- (78) 賈母歪在榻上，與眾人說笑一回，又取眼鏡**向**戲臺上照一回，又說：(程甲53／12 B10)
- (79) 雨村**向**窗外看道：“天也晚了，仔細關了城，我們慢慢進城再談，未為不可。”(程甲2／11 A 1)

介詞目的語の種類によって視線が届く範囲には差が見られるが、次の2例で表されているのは鏡像に視線を送るという場面である。

- (80) 這小紅也不梳洗，向鏡中胡亂挽了一挽頭髮，洗了手，腰中束一條汗巾，便來打掃房屋。
 (程甲25／1 A 6)
- (81) 賈瑞接了鏡子，想道：“這道士倒有意思，我何不照一照試試？”想畢，拿起“風月寶鑑”來，向反面一照。只見一個髑髏，立在裡面。(程甲12／6 B 9)

以上の用例はいずれも述語動詞が視覚的なものであり、「視線が移動する」ことが明らかであるが、そもそもこの「視線」という要素については“向”が本質的に具えている要素であると言っても過言ではない。“向”の「移動する」という動詞用法にしても「～に向けてVする」という介詞用法にしても、およそ「指向性」という言葉で表されるものは、視線の終点としての視点の存在を前提とするものである。なお、先行研究において「(動作の) 方向」を表わすとされるものがこれに該当する。次の(82)、(83)は頭がそちらに向いているという用例であり、(84)は抽象的な方向を表している。

- (82) (黛玉) 說着賭氣上床，面向裡倒下拭淚。禁不住寶玉上來“妹妹”長“妹妹”短賠不是。
 (程甲17／14B 9)
- (83) 寶玉坐在床沿上褪了鞋，等靴子穿的工夫，回頭見鴛鴦穿着水紅綾子袄兒，青緞子背心，束着白縐紬汗巾兒，臉向那邊低着頭看鍼線，脖子上帶着扎花領子。(程甲24／1 B 6)
- (84) 這小紅雖然是個不諳事體的丫頭，因他原有三分容貌，心內妄想向上攀高，每每要在寶玉面前現弄現弄。(程甲24／14A 2)

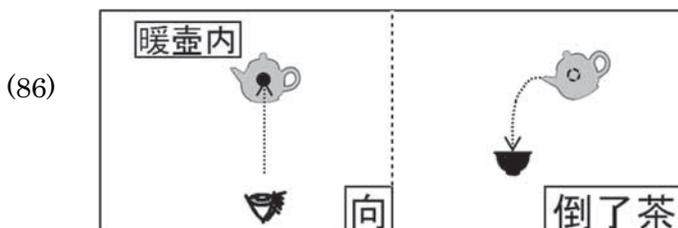
さらに、次の例のように動作主が無生物であるものもよく見られる。

- (85) 眾人聽了越發闐然大笑的前仰後合。只聽咕咚一聲响，不知什麼倒了，急忙看，原來是史湘雲伏在椅子背兒上，那椅子原不曾放穩，被他全身伏着背子大笑，他又不防，兩下裡錯了筭，向東一歪，連人帶椅子都歪倒了。幸有板壁擋住，不曾落地。(程甲42／10A 4)

そして、“向”が「視点」を導く用法には、次のような用例も存在する。

- (86) 然後纔向茶桶上取了茶碗，先用溫水過了，向暖壺中倒了半碗茶，遞與寶玉吃了，自己也嗽了一嗽，吃了半碗。(程甲51／7 A10)

本例には“向”が二つ用いられているが、前者はBで確認した「からだの一部が移動する」用法である。そして後者は本節で確認する「視線が移動する」用例であると考えられ、お茶の出所としての“暖壺中”に「視点」を導く働きを担っている。いま試みに(73)における「視線の移動」について図示すると、以下のようになる。



先ずSの視線が“暖壺中”に向き、視点としてマーキングし、そして、そこから次の“倒了半碗茶”という動作が起こっている。当然、中身まで透視することはできないが、そこに意識付けがなされていると言うことが出来、つまり、視線が介詞目的語に移動し、意識がそこに留まった状態で後続の述語動作が起こるのである。あたかも「起点」の用法であるように感じられるが、これも1.2で確認した「物を取り出す」用例同様に、“向”は“暖壺中”に視点・意識が移動する部分のみを担っている。そして、このような用例は次節で確認する感情・意識が移動する用法に通じるものである。

3.5 感情・意識が移動 (G)

本節では“S向NV”構造においてSからNへ感情や意識が移動する用例を考察する。下位分類として、①SからNへの単純なベクトルを表すものと、②主にモノの移動により実現される「S←N」というベクトルを内包した、SからNへのベクトルがある。述語が心理動作であるなど出来事において物理的な移動が無く可視性の低いものが前者に、介詞目的語に対して要求する意識を表す述語が後続するタイプが後者に該当する。

前者には、例えば(87)のような介詞目的語の人物に対して「恨みをもって(言う)」といった心理動作が述語となっているものがある。

(87) 唐二棒椎道：“這吹唱的好聽我走過去看看。”看了一會回來，垂頭喪氣，向虞華軒抱怨道：“(儒林47／9 A 6)

本例は後ろに“道”を伴い「Dことば移動する」タイプとも関連するが、ここでは“抱怨”という心理動詞の特性——物理的移動がなく可視性が低い——から既述のタイプには属さないものであると考える。このように本節で確認するGの分類は、これまでに挙げた用例に関連するものも少なくないが、そもそも言語の表出行為自体が言語使用者の意識を顕在化する過程であるので、発話内容へ意識が向いていると考えられる。その意味で“S向NV”という構造の全ての用例が広義的な意味でNへの意識付け：意識の移動、を表す用例と言える。しかしながら、とりわけ身体の移動も音声・視線の移動も含まない心理動作については、狭義的に感情のみがNへ移動していると言えるのではないだろうか。

次に、“S向NV”におけるVが“要、借”などであり、SがNから何かを獲得することを期待するものについて検討する。以下に挙げる用例は出来事全体として「SからNへ向けて何かを要求する」ものであり、具体的には言葉による伝達が中心となると考えられるが、Dの分類と異なるのはNからSへのベクトルをも内包する点である。具体的な用例としては以下のようなものがある。

(88) 因去年九月上縣來交錢糧，一時短少，央中向嚴鄉紳借二十兩銀子，每月三分錢，寫立借約送在嚴府，小的卻不曾掣他的銀子。(儒林5／3 B 2)

(89) (鄒吉甫) 因問女兒要了一隻鴨，數錢去鎮上打了三斤一方肉，又沽了一瓶酒和些蔬菜之類。向鄰居家借了一隻小船，把這酒和鴨肉都放在船艙裏，自己棹着，來到楊家門口。(儒林11／7 B 8)

(90) (鳳四老爹) 心裡想道：“我何不找着他，向他要了做盤纏回去。”(儒林52／1 A 5)

(91) 過了一日，陳木南寫了一个札字，叫長隨拿到國公府，向徐九公子借了二百兩銀子。(儒林53／6 B 2)

- (92) 次日，早有雨村遣人送了兩封銀子、四疋錦緞，答謝甄家娘子；又一封密書與封肅，託他向甄家娘子要那嬌杏作二房。(程甲2／1 B 4)
- (93) 馬道婆見了這些東西，又有欠字，遂不顧青紅皂白滿口應承，伸手先將銀子拿了，然後收了契。向趙姨娘要了張紙，拿剪子鉸了兩個紙人兒，遞與趙姨娘。(程甲25／7 B 1)
- (94) 鳳四老爹道：“我有個朋友陳正公，是這裡人。他該我幾兩銀子，我要向他取討。”(儒林52／3 B 6)

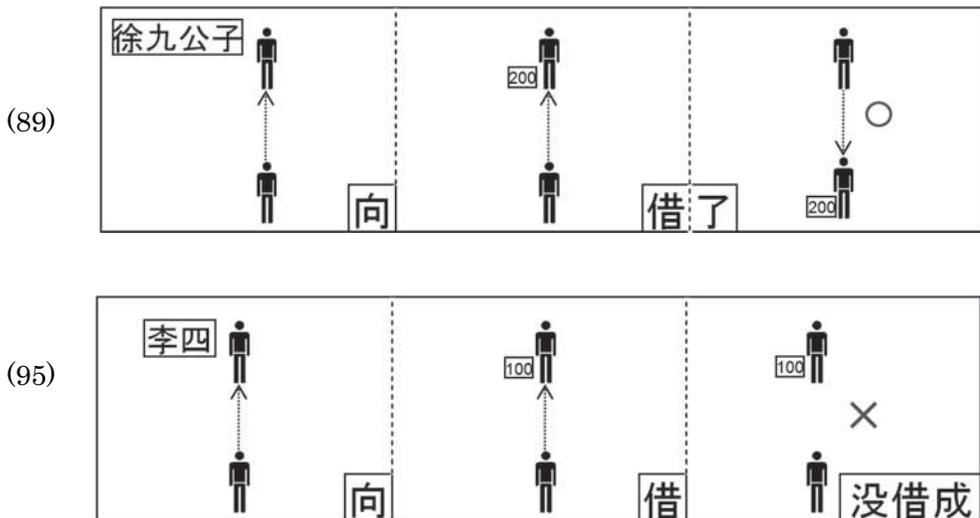
(89)では、“向”とともに“問”の使用も確認される。“問”は「要求する相手」を導く介詞であるが南方の作品に多く見られる傾向がある (cf.干野2007)。“向”と“問”の互換性については次章で触れることとする。また、(92)では、述語動詞の“要”の目的語は物ではなく“那嬌杏作二房”という事柄であり、その場合は「起点」という解釈はそぐわない。

これらの用法はBで確認した「物を取り出す」用法と、介詞目的語の種類に違いはあるものの、「モノの獲得(を期待する)」という点において共通性が確認される (cf.干野2009)。それに加えて、次の(95)、(96)のような表現の存在が示す通り“向”が「物の獲得」を含意しない点もBと同様である。

(95) 张三昨天向李四借100元钱，但没借成。(張国憲2001より)

(96) 张三向李四征收个人所得税，但李四不交。(張国憲2001より)

ここで(89)と(95)で述べられている出来事について図示を試みれば、次のようになる。ここに挙げた「借りる」という行為は「(相手に) 求める／(相手から) 手に入れる」という二つの局面を内包すると考えられるが、(95)では後半が達成されていない。



上図から“向”が表すのはSからNに向けた「意識の移動」であり、述語動作の結果として物を獲得することまでは言及していないことは明らかである。このような“向”について、芳沢1997ではモノの移動に注目して、「モノの移動をXがYに求めるという形で働

きかけ（中略）求める類が働きかけるモノの移動の方向は常に $X \leftarrow Y$ である。」として「 $X \rightarrow Y$ ($X \leftarrow Y$)」あるいは「 $X \rightarrow Y$ ($X \leftarrow Y$)」と記号化する⁷。これは本稿で述べるところの「意識（= NからSへ物などが移動することを期待）の移動」に相当する。

この“向”が“従”や「起点」と解釈されるのは、出来事全体として見た場合、「要求する意識の移動」よりも「新たな物の発生および移動」の方が顕著な事象であり、且つ「求める」行為の目的が「獲得」にあることを鑑みれば、その点に重点を置いた記述となるのは自然なことであると言えよう。

『紅樓夢』および『儒林外史』で確認される用例は、介詞目的語と述語成分の種類と言う点で多岐にわたり、それが本稿で語彙資料として用いる理由であることも上述の通りである。しかし、当然ながら、既述の用例には挙げられていないタイプの用例も存在する。例えば、次のような例が見られる。

(97) 陳顔留房德到裡邊坐下，點起燈火，向壁縫中張看，那人還未曾回。（『醒世恒言』卷三十30A5）

(98) 只見山凹裡起一陣風，風過處，向那松樹背後，奔雷也似吼一聲，撲地跳出一箇吊睛白額錦毛大蟲來。（『水滸傳』卷之一5A8）

上記2例に加えて、さらに現代語において“向雷锋同志学习”といった表現が存在するが、これらの例はいずれもSが“向”の目的語に視線・意識を向け、そこから「新しい情報」を獲得しているという共通性がある。具体的には、「(その人が) まだ帰っていない」という事実であり、トラであり、学習内容である。このような例において「～から」という「起点」を表す概念は相性が良い。しかし、“向”自体が担っているのはそれらの介詞目的語へ向けた「移動」のベクトルのみなのである。

3.6 小結

本章では、介詞目的語が主に人物であるものについて考察を行った。本稿の主題である「移動するもの」については可視性の比較的低い要素が中心であり、「声」>「身振りで表される意思」>「視線」>「感情・意識」の順に意識されにくいものとなっている。

前章および本章において、AからGの7つの要素から“向”の特性を確認したが、本稿の冒頭でも述べた通り、これらは便宜的な分類であり、「移動するもの」という観点から一貫性のある解釈が可能であることを立証するためのものである。用例を検討する過程において複数の要素にまたがるとした用例に幾つか見られたが、畢竟、それらを統合したものが“向”の意味であると考えられる。用法の細分化は際限なく可能であるが、それらを統合して、「何らかの要素が移動する」と捉えることが“向”の汎用的な特性に基づいた理解であると考えられる。

4. 類義語関係にある介詞との接点

4.1 類義語と同義性について

第2、3章において“向”が「何らかの要素が移動する」という観点から帰納できることについて考察をすすめ、その「移動物」の拡がりこそが“向”が持つ意味ネットワークの拡がり形成していることが明らかとなった。前章までは“向”自体の意味の考察に主眼を置いたが、本書では『紅樓夢』の版本間に見られる異同から“向”と類義語関係にあ

る介詞との接点を考察する。

一般に、人が言語を運用してある出来事を述べる際、出来事に対して一種類の表現形式を表出すれば事は足り、別の類義表現について顧みることが少ない。当然、頭の中で適切な表現を選択することはあっても、表出されるのは種類だけである。しかし版本間に見られる「異同」とは、そのような「同等のもう一つの表現」を垣間見せる点で極めて興味深いものである。そもそも類義語とは、それぞれの介詞が持つ意味的なネットワークの間に重なる部分が存在することで成立すると考えられ、類義語の語彙間に見られる同義性とはそのような意味的重なりに見出されるものである。『紅樓夢』に見られる版本間の異同は、まったく同一の文脈でありながら異なる介詞が用いられており、その意味では極めて「同義的」に用いられていると考えられる。

こんかい調査を行ったのは『紅樓夢』のいわゆる「庚辰本」と「程甲本」である。『紅樓夢』の諸版本については太田1998:50に主要なものがまとめられているが、80回本と120回本からそれぞれ比較的整っているテキストである両者について、第1回から第80回における異同を調査した。

調査の結果、ある版本で“向”となっている箇所が、もう一方の版本では“問、往、和、在、朝”となっている異同が確認された。これらは、“向”の多義性を如実に物語るものである。

次節ではそれぞれの異同を検証する。

4.2 『紅樓夢』版本間の異同

4.2.1 問

本項では“向”と“問”に関する異同を考察する。「程甲本」に見られる次の例では“向”が本稿におけるGの用法として機能している。

(99) 次日，早有兩村遣人送了兩封銀子、四疋錦緞，答謝甄家娘子；又一封密書與封肅，託他向甄家娘子要那嬌杏作二房。（程甲2／1B4）

ここでは“他”が“甄家娘子”に「求める」という内容を表しており、“向”はその際の声などによる要求の意識が相手に移動していると考えられる。ところが、この箇所について「庚辰本」では次のように“問”を用いた表現となっている。

(100) 次日，早有兩村遣人送了兩封銀子、四疋錦緞，答謝甄家娘子；又寄一封密書与封肅，轉託問甄家娘子要那嬌杏作二房。（庚辰2／2A9）

介詞“問”は馬貝加2002では「求索者」という用法に分類されており、宮田1976にも「金子などを借りたり、ものなどを要求したりするときに、その対象を示すには、『儒林外史』は多く“問”を用いる」という地域性に言及した記述がある。“問”本来の用法については中村1988に詳しく、「動詞“問”と介詞“問”は統一的に説明できる。すなわち，“問”は「求める」という基本的な意味をもち、文脈により“訊問”（尋ねる）とか、“向”（～から）とかいう意味が生まれるのである。」とする。このような介詞“問”は述語に「要求する」という意味を持つ動詞のみを取り、使用範囲は限定的である。そのような点で、汎用性の極めて高い“向”とは両極端な関係にあると言えよう。

“問”については上述の通り地域性という観点からの考察が必要であるが、本稿では意味的観点から“向”との互換性に注目したい。“問”が「要求する相手を導く」という極

めて特徴的な使われ方をするのに対し、“向”は「何らかのものが移動する」ことを表すが、その広範な「移動物」の候補の中から、ここでは声などを含めた「要求」する意識が移動するという点に焦点がある。介詞としての背景が大きく異なる二者でありながら(99)と(100)のような異同が見られるのは、このような意味的に重なる部分を共有しているからに他ならない。

4.2.2 往

次に“往”と“向”に関する異同を考察する。(101)は「庚辰本」に見られる例で“往NV”という形式が見られるが、同じ箇所について(102)の「程甲本」では“向NV”という表現になっている。

(101) 王夫人笑指向代玉道：“这是你鳳姐姐的屋子。回來你好往这里找他來，少什麼東西只管和他說就是了。”(庚辰3／8B6)

(102) 王夫人笑指向黛玉道：“這是你鳳姐姐的屋子。回來你好向這裡找他去，少什麼東西只管和他說就是了。”(程甲3／9A2)

(102)に見られる“向”は本稿で言うところのAの用法に該当する。“往”も“向”も元々の動詞用法として「～に行く」という意味を表すことが出来る。しかし“往”は移動先や方向を表す用法を持つものの、それらの目的語はいずれも場所を表す語であり、“向”のように人物を目的語に取ることは出来ない。その点で、介詞の「守備範囲」という点からは、“向”の方がより広範に用いられると言えよう。

本項で確認した異同の例について言えば、この二種類の介詞間には「ある場所へ(からだ全体が)移動する」という動詞としての原義に近い用法で意味的な重なりがあると考えられる。

4.2.3 和

本項では“和”と“向”に見られる異同について考察する。両者の介詞用法上の接点は、目的語が人物である場合に見られる。“和”の介詞用法はそもそも、「包括する」ことを表す用法に始まり、その後、介詞目的語の人物を動作行為が及ぶ対象とする用法へと発展した。次の例では、“和”が「程甲本」において話し相手を導く用法で用いられている。

(103) 等我去到東府瞧瞧我們珍大奶奶，再和秦鐘的姐姐說說，叫他評評這個理！(程甲10／2B1)

この箇所が「庚辰本」では“向”を用いた表現となっており、本稿に見る「D：声が移動する」用法となっている。

(104) 等我去到東府瞧瞧我們珍大奶奶，再向秦鐘他姐姐說說，叫他評評这个理！(庚辰10／2A7)

さらに次の例では「程甲本」に見られる“向”が「E：身振りにより表される意思が移動」する用法で使われているが、この例においても“和”と“向”の異同が見られる。

(105) 賈環見宝玉同邢夫人坐在一個坐褥上，邢夫人又百般摸索撫弄他，早已心中不自在了，坐不多時，便和賈蘭使個眼色兒要走。賈蘭只得依他，一同回身告辭。(庚辰24／3A3)

(106) 賈環見寶玉同邢夫人坐在一個坐褥上，邢夫人又百般摸索撫弄他，早已心中不自在了，坐不多時，便向賈蘭使個眼色兒要走。賈蘭只得依他，一同起身告辭。(程甲24／3 A10)

以上、二組の異同の例について、“和”は動作行為の及ぶ対象を導き、一方、“向”は声や身振りの移動先を導いている。そのようにして“和”と“向”には意味的な重なりが存在しているのである。

4.2.4 在

続いて、“在”と“向”の間に見られる版本間の異同を考察する。次の(107)において“在”は動作が行きつく場所を表しているが、「程甲本」における同じ箇所(108)では“向”が「C：体の一部が移動する(物の移動を伴う)」用法となっている。

(107) 因見寶玉獨作四律大廢神思何不代他作兩首也。省他些精神恐有不到的之處，想着便也走至寶玉案傍，悄問：“可都有了？”寶玉道：“纔有了三首，只少“杏帘在望”一首了。”代玉道：“既如此你只抄錄前三首罷，赶你寫完那三首，我也替你作出這首了。”說畢，低頭一想，早已吟成一律，便寫在紙條上，搓成個團子，擲在他跟前。(庚辰17-18／25A8)

(108) 因見寶玉構思太苦，走至案旁，知寶玉只少“杏帘在望”一首，因叫他抄錄前三首，卻自己吟成一律，寫在紙條上，搓成個團子，擲向寶玉跟前。(程甲18／9 B10)

さらに、次の例では“向”の「B：からだの一部が移動する」用法に関し、異同が見られる。

(109) 因用上等人參二兩，王夫人取時，翻尋了半日，只在小匣內尋了幾枝簪挺粗細的。(庚辰77／1 A6)

(110) 因用上等人參二兩，王夫人取時，翻尋了半日，只向小匣內尋了幾枝簪挺粗細的。(程甲77／1 A6)

この用例において「庚辰本」の例(109)では興味深い書き込みが見られるので77回の冒頭を右に掲載する。三行目に該当箇所が見られるが、“香”を消して“在”と改めている。さらに、同じ行には“只”を“枝”に改めている箇所も見られることから、これらは同音文字を適切な表現に改めていると考えられる。つまり、この“香”から“在”への書き換え箇所は、“香”から直ぐに想起される“向”ではなく、同義的な語彙である“在”に改めている点で興味深い。

以上、“向”の用法のうち、体全体や体の一部の移動先に焦点がある場合について、“在”との意味的な重なりが存在すると言える。

4.2.5 朝

本項では“朝”と“向”の意味的な接点について考察する。“朝”は動作の方向を導く用法を持つが、次の(111)では移動する方向

話說王夫人見中秋已過鳳姐病已先減了雖未大愈可以出入行走
得了仍命大夫每日珍脈服藥又開了丸藥方未配調經養榮丸曰
用上等人參二兩王夫人取時翻尋了半日只香小匣內尋了幾枝簪挺
粗細的王夫人看了嫌不好命再找去又找了一大包鬚沫出來王夫

を表している。

(111) 湘蓮冷笑道：“也只如此，我只当你是怕打的。”一面說，一面又把薛蟠的左腿拉起来，朝葦中濘泥處拉了几步，滾的滿身泥水，又問道：“你可認得我了？”（庚辰47／9 A 9）
一方、「程甲本」では同じ箇所“向”を用いる。

(112) 湘蓮冷笑道：“也只如此，我只當你是怕打的。”一面說，一面又把薛蟠的左腿拉起来，向葦中濘泥處拉了幾步，滾的滿身泥水，又問道：“你可認得我了？”（程甲47／11 A 7）

この“向”は「体全体が移動する」用法で用いられている。さらに、挨拶を行う用例においても異同が確認された。以下の例を比較されたい。

(113) 柳家的母女忙朝上磕頭，林家的帶回園中，回了李紈探春。（庚辰62／1 A 7）

(114) 柳家的母女忙向上磕頭，林家的就帶回園中，回了李紈探春。（程甲62／1 A 7）

(113)において“朝”は“磕頭”という動作の方向を導き、(114)において“向”は挨拶の意識の移動を表していると考えられる。

以上の2組の用例から、“朝”は動作の方向を表すという用法で一貫しており、“向”は何らかのものが移動するという意味で一貫していることが確認され、そのような点で“朝”と“向”には互換性が確認される。

4.3 小結

本章では『紅樓夢』の二種類の版本、即ち「庚辰本」と「程甲本」に見られる介詞“向”に関連する異同から、“向”と互換性のある介詞との意味的な接点について考察した。“向”とその類義詞について、“向”の各用法における「移動するもの」との対応関係をまとめると次の通りである。

向	移動する要素						
	A	B	C	D	E	F	G
	からだ全体	体の一部	体の一部(物の移動を伴う)	声	身振により表される意思	視線	感情・意識
問							
往							
和							
在							
朝							

この表からは、縦軸に並ぶ“向”の類義語の用法は、それぞれ“向”の異なる焦点化により担われていることが理解される。ここに示したものは本稿で確認された異同に対する考察のみを踏まえたものであり、空欄となっている箇所についても互換性が考えられるものも存在する。例えば“和”は要求する相手を導く用法を持つため、向のGの要素で表される用法との互換性が考えられる。

しかしながら、一般的に介詞はその目的語が人物であるか場所であるかに限定されるものであり、そのような分類基準を超越した“向”が持つ「守備範囲」を同等あるいはそれ以上を網羅する類義詞はないと思われる。

本章における考察から、雷文治2002から読みとれるように“向”が複数の介詞の用法を内包していることが確認された。それらの類義詞と“向”は異なる意味ネットワークを有し介詞としての背景は異なるものの、ある用法においては意味的な重なりや接点を確認され、それが類義語の類義語たる所以と言えよう。

“向”は「何らかのものが移動する」という大まかな意味枠組みのもと、具体的に「移動するもの」の違い、即ちどの移動物に焦点があてられるかの違いにより多様な意味を担っているのである。

5. まとめ

本稿では介詞“向”が「何らかのものが移動する」という一貫した基準から記述が可能であることを明らかにした。具体的には「からだ全体、からだの一部、声、身振りにより表される意思、視線、感情・意識」が移動する要素であることを第2章、第3章において考察した。

さらに第4章では『紅樓夢』の「庚辰本」と「程甲本」の間に見られる異同から“向”と類義語関係にある5つの介詞を取り上げて接点を検討し、“向”が「焦点化」を行うことで様々な意味を表していることを確認した。

“向”について、本稿では「大まかな記述」を心がけた。それを端的に表したものが、第2章および第3章において使用した図式に見られるSからNへの「ベクトル」である。SやNは変数的であるものの「ベクトル」自体には変化がない。出来事全体における「移動物」というものを漠然と捉えることが、“向”を使用する基本にあると思われる。介詞は虚詞であるため実詞の間に挟まれて使用され、実詞と実詞の関係性を示すものである。そのような「つなぎ」としての介詞を記述するにあたっては、柔軟な姿勢で行うことがより実際的であるように思う。

本稿は“向”の意味記述を中心に据えたものであり、類義語との用法の違いについては議論が不十分である点は否めない。今後の課題としては、類義語に挙げた介詞の意味ネットワークを明らかにすることが挙げられ、その蓄積が類義語関係にある表現の理解につながるものと考えられる。

註

- 1 「“向”在近代汉语中是一个语法意义比较复杂的介词，可以介绍动作行为的方向、有关对象、处所方位、时间等。不同的语法意义产生的时代不同。」とある。
- 2 馬貝加2002では“向”を“始发处、经由、终到处、所在处、方向、时点、临近点、所

- 对者、言谈者、交与者、求索者、议题”の12項目に分類する。
- 3 “及／与”が動詞から伴随介詞へと文法化する過程について、次のように述べる。
“在“偕同、与……在一起”这个义位上，“及”、“与”是同义词，它们都能构成“NP1 + V1(及／与) + NP2 + V2”这样的连动式。在这个连动式中，“及／与”的宾语NP2在语义上是V2所表示的动作行为的参与者，因而导致原结构的重新分析，“及／与”因之由动词语法化为伴随介词。”
 - 4 (参考訳) 顔をかくしたままで泣きつづけていた宝釵も、この言い草にはつまたおかしくなり、とうとううつむいたまま床に向かって「チッ」と舌打ちしてみせ、
 - 5 (参考訳) これを聞いた熙鳳は、チッと一声笑うと、賈璉につばを吐きかけ、うつむいて食事をつづけるのでした。
 - 6 (参考訳) 若党たちの方でも、言い出したらひかぬ珍の平素の気性を心得ていますので、ひとりの若党がつかつかと歩みよったかと思うと、蓉の顔めがけてベッと唾をはきかけました。
 - 7 芳沢1997では、“向”と共に起する動詞のうち、“授受動詞を1与える類，2受ける類，3求める類に下位分類”し、2について、“「買う」「借りる」という行為は主体Xから相手Yに向かっていくのだが、モノはYからXに移動する。”として、“「X→Y (X←Y)」”と記号化する。さらに3については“XはYに働きかけているが、モノはまだ移動しておらず、モノの移動をXがYに求めるという形で働きかけている。”とし、その意味で3は授受動詞と対面動詞（XはYに働きかけるが、モノの移動は伴わない）の中間に位置するとしている。本稿では“向”を統合的に捉えるという観点から、2および3を同じ分類と考える。

[参考語料]

- 《儒林外史》臥閑草堂本（嘉慶八年（1803年）），人民文學出版社，1975年
《紅樓夢》（庚辰本）《脂硯齋重評石頭記》（乾隆二十五年（1760年）），沈陽出版社，2006年
《紅樓夢》（程甲本）《新鐫全部繡像紅樓夢》（乾隆五十六年（1791年）），沈陽出版社，2006年
《品花寶鑑》幻中了幻齋刊本（道光二十九年刊），《明清善本小說叢刊初編》，天一出版社，1985年
《醒世恒言》葉敬池刻本，《馮夢龍全集》，上海古籍出版社，1993年
《水滸傳》《明容與堂刻水滸傳》，人民文學出版社，1975年

[参考文献]

- 侯学超《现代汉语虚词词典》，北京大学出版社，1998年
雷文治等《近代汉语虚词词典》，河北教育出版社，2002年
蒋绍愚·曹广顺等《近代汉语语法史研究综述》，商务印书馆，2005年
马贝加《近代汉语介词》，中华书局，2002年
宮田一郎「近世語にみえる介詞について——在，向，去——」『明清文学言語研究会会報10号』，1968年；『宮田一郎中国語学論集』，好文出版，2005年
吴福祥《汉语伴随介词语法化的类型学研究---兼论SVO型语言中伴随介词的两种演变模式》

- 《中国语文》第1期，2003年；《语法化与汉语历史语法研究》，安徽教育出版社，2006年
干野真一『日本中国語学会第59回全国大会予稿集（北海道大学）』，2009年
干野真一〈表示要求对象的介词——谈“向、问、和、跟”〉《汉语汉文化论丛》，白帝社，
2007年
张国宪〈制约夺事成分句位实现的语义因素〉《中国语文》第6期，2001年
芳沢ひろ子「動作の対象を導く“向”と“跟”」『中国語』，内山書店，1997年
太田辰夫『新訂 中国歴代口語文』，朋友書店，1998年（旧訂本は江南書院，1957年）
宮田一郎「『儒林外史』のことば」『人文研究』28巻4分冊，1976年；『宮田一郎中国語学
論集』，好文出版，2005年
中村浩一「介詞“問”について」『語学教育研究論叢第5号』，1988年